

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	タンザニアのキャッサバ栽培地域における雨季の食料生産の調査
氏名 Name	平田 二千翔
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	農学研究科・地域環境科学専攻・博士後期課程3年
渡航国 Country	タンザニア
渡航日程 Travel schedule	2023年 1月 6日 ~ 2023年 5月 16日

- ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- 写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- 各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- 日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本渡航の目的は、キャッサバの生産量が多いタンザニアの沿岸部において、小農がどのように雨季に食料を確保しているのか、またキャッサバの栽培が食料の確保にどのような役割を果たしているのかについて調査することである。

アフリカでは全人口の50%以上は農村部に住んでおり、農村部のほとんどの世帯は小規模な農業によって自給的な食料や現金を得る小農である。アフリカでは今後、さらなる人口の増加や気候変動が予測されており、食料安全保障が脅かされている。一方、アフリカでは近年、各地でキャッサバの生産量・栽培面積が増えている。キャッサバは優れた環境ストレス耐性をもつとともに、単位面積当たりの収量も多い作物である。今後のアフリカにおいて小農が安定して食料を確保することができるかどうかを理解するためには、キャッサバの栽培が小農の食料の確保にどのような影響を与えるのかについて評価する必要がある。

本渡航では、修士課程在籍時より調査を続けてきた、キャッサバを含む多様な主食作物が栽培されるタンザニア南部キルワ県のマトウンビ丘陵に滞在し、キャッサバを栽培する小農10世帯を対象とする1月から4月までの毎月二週間の主食の記録、記録された主食の入手経路の聞き取りによる調査を行う。

成果 Outcome

主食作物を記録した結果、いずれの世帯も、コメ、トウモロコシ、キャッサバを頻繁に主食として利用していた。すべての世帯はそれらの作物を昨年に栽培していたが、1世帯以外はコメ、トウモロコシの収穫物を1月にはすでに食べつくしており、雨季にはそれらを購入していた。キャッサバを収穫しつくした世帯はなく、どの世帯もいつでも収穫できるキャッサバを畑に残していた。昨年に収穫したトウモロコシを食べつくしていた世帯は、3月のトウモロコシの収穫期の前後でトウモロコシとキャッサバの食事頻度が異なっており、トウモロコシの収穫後には、トウモロコシの収穫前に比べて、キャッサバの食事頻度が少なくなり、トウモロコシの食事頻度は増えていた。昨年に収穫したコメ、トウモロコシの備蓄が残っていた1世帯は、他の世帯に比べてキャッサバの食事回数が最も低かった。また、キャッサバを大規模に栽培する世帯は、キャッサバを販売することで現金を得て、トウモロコシやコメを購入していた。

これらから、キャッサバはトウモロコシやコメといった他の主食作物の不足を補うように利

用される主食作物であり、いつでも収穫することができる備蓄食料の役割を担っていることが明らかになった。また、現金収入源にもなることから、禾穀類の収穫量の変動に合わせて、多様な利用が可能な作物となっていた。

今後の展望 Prospects for the future

本渡航では、調査地において雨季に主食となる作物とそれらの入手方法についての調査結果を得た。今後、昨年 of 乾季に行った調査の結果と合わせて主食作物の季節変動を分析することで、アフリカの小農の一年を通じた食料の確保のためのキャッサバの役割が明らかになることが期待される。また、一年だけでなく、継続的に同様の調査が行われることで、環境の変化に対する小農の食料の確保におけるキャッサバ栽培の役割がより詳細に明らかになると考えられる。本渡航の成果は、投稿論文、博士論文としてまとめられ、小農の作物選択による危機管理戦略の解明、さらにはアフリカにおける食料安全保障の確立に寄与することとなる。



図. 昨年に植えたキャッサバの畑（写真右側）と今年植えたキャッサバとトウモロコシが混作された畑（写真左側）